

長崎の悲劇 忠実に紹介

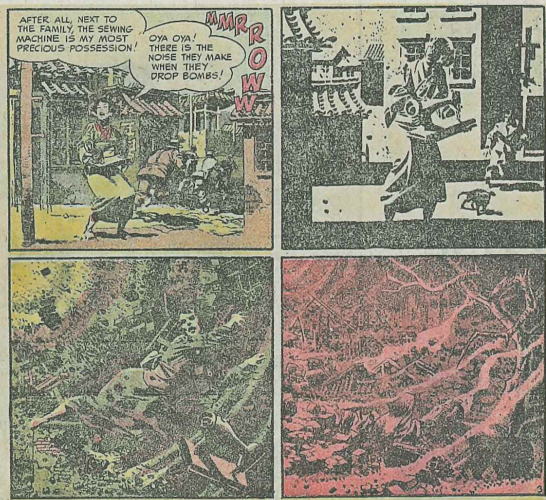
知られざる米国の原爆漫画

長崎総合科学大名誉教授

ブライアン・バークガフニ

寄稿

田川トシオの妻トミは3人の子供たちを連れて防空壕へ避難したが、大切なマシンを取りに戻った際に被爆して即死する



ハーベイ・カーツマンの肖像イラスト

戦争に嫌悪感「美化したくない」

「語」を24回のシリーズで発刊した。栄光のエピソードではなく、戦闘に仕方なく巻き込まれる兵士や罪のない一般市民の姿を描いた画期的なものであった。

サンフランシスコ平和条約が結ばれた翌年の1953年6月、カーツマンの草案、そして同僚のウォーリー・ウッドのイラストによる「ATOM BOMB! (原子爆弾)」と題する7ページの漫画がシリーズ33号に掲載された。広島と長崎への原爆投下と被爆者の体験に関する情報がまだ乏しい時期だった。

長崎を舞台としたこの作品は、田川トシオという日本人兵士が母親、妻、そして3人の幼い子供たちを残して入隊する場面から始まる。原爆が投下されると、妻が屋外にいて即死、長男は家のがれきで焼死、長女は放射線被ばくの後遺症を患って防空壕で息絶える。その後シベリア抑留中の田川トシオが生き残った母親から悲報を受けてショックのあまり死んでしまう、という非道なシーンが続く。

作者は当時の風潮に逆らって原爆の使用を正当化したリせず、正誤や善悪を決めつけないで、史実をできるだけ忠実に紹介しながら、ある一般家庭の悲劇を描いてゆきたい、と述べている。

物語は、父親が入隊した時

にまだ赤ん坊だった次男のクニが復興を目指して立ち上がる長崎の街を走り回るといって、好意的で希望に満ちた場面が終わるのであった。

ハーベイ・カーツマンは晩年のインタビューで次のように語った。「戦争関係の漫画を描こうと思ったとき、戦争について何を言うのかということに私にとって最も重要だった。なぜなら、戦争を美化したくないと強く感じていた



ON AUGUST 9, 1945, THE A-BOMB KILLED 20,793 PEOPLE AND DESTROYED 16,409 HOMES! BUT HOPE WAS NOT DESTROYED IN NAGASAKI! AND LIFE NURTURED BY HOPE BLOOMS AGAIN! PLANTS, BUILDINGS, CHILDREN GROW IN NAGASAKI. FOR THERE IS HOPE IN NAGASAKI! THERE IS HOPE IN THE WHOLE WORLD!

祖母と次男のクニは、原爆の被害から復興しようとする長崎の街をうれしそくに駆け回っている。キャプションには「1945年8月9日。原爆は2万9793人を殺し、1万8409軒の住宅を破壊した。そして、長崎から希望が失われるとはなかった!そして、希望に育まれた命が再び花開き、植物も、子供たちも、建物も、長崎に希望があるからこそ育つていくのだ!世界中に希望があるのだ!」と書かれている

からだ。『ツー・フィステッド・テールズ』が世に送られる前、戦争をテーマにした漫画は勇ましい手柄話ばかりで、誰も戦争の悲惨さを取り上げようとしていなかった。私から見れば、それは子供たちに対して迷惑をかけることになると思った」

「ツー・フィステッド・テールズ」を発表した後、カーツマンは絶大な人気を博した風刺雑誌「MAD」を創刊し、米国のさまざまな出版物をはじめ、「セサミストリート」などテレビ番組や映画にもイラストを提供し続けた。また、ニューヨークの名門スクール・オブ・ビジュアル・アーツで長年にわたり教鞭を執った。1993年、がんを患ってこの世を去った。享年69。

ハーベイ・カーツマンは、漫画がユーモアに富むだけでなく、知性的であり、社会の不条理や偽善を暴くべきだという考えを確立するのに貢献した。コミック業界の年次賞である「ハーベイ賞」は彼にちなんで名付けられており、手塚治虫や高橋留美子など、多くの日本の漫画家もこの賞を受賞している。

しかし、長崎への原爆投下による悲劇に焦点を当てたカーツマンの作品と切実なメッセージは、歴史の陰に消えてほとんど知られていないのである。